様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（国語） ／小島　明子

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

①国語コースの教科専門担当教員（古典文学）として、授業ではできるだけ教科書に出てくる標準的な作品を取り上げることとする。また学生に、一語一語の言葉の意味を探求する課題を与え、基礎的な教育力を鍛錬する。
②演習形式の授業によって、自ら調べる力、それをわかりやすくまとめる力、聞き手に明瞭に伝える力が涵養されるよう指導する。

2．点検・評価

年度目標①について
○後期に教材とした『平家物語』は演習形式の授業であったことから、こまめに辞書を引かせた。その結果、一つの単語にも複数の意味が読み取れること、それらが歴史的な変遷の中で派生したことを認識し始めることができた学生が多かったと思われる。
○さらに後期には「初等中等教科教育実践」の授業で『枕草子』を教材として、学生に模擬授業をさせる授業を行った。学生は模擬授業の準備を進めていく中で、これまで曖昧にしか語の意味をとらえていなかったことに気づくことができ、その結果、古典語のおもしろさと同時に難しさにも直面し、次の段階に進む準備がなされたと考えている。

年度目標②について
後期は演習形式・模擬授業形式の授業がほとんどで、自ら調べる中で古典文学の魅力を発見できたと言う学生も数人いた。また発表用の資料の作成を通じて「まとめる力」はかなりの進歩が感じられた。ただ最後にそれを「伝える力」は個人差が大きく、まだ声のコントロールが難しい学生・話の展開がつかめていない学生もいるが、クラス全体のレベルは向上した。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①演習科目のみならず、講義科目においても、学生が自ら思考して自分の意見を発信できるように授業を進める。
②中学生・高校生の間で「古典離れ」が進む状態が問題視されているが、まずは教員をめざす学生が古典文学に興味を深めることができるように指導する。
③学生の個々の特性・資質に配慮した助言を行い、必要があれば個人的な相談に応じる。

２．点検・評価

年度目標①について
後期は講義科目がなかったが、前期の講義科目では毎回「小テスト」を課して、その日の授業内容を踏まえた考察・意見を書かせていた。これにはコメントを加えて返却する他、何人かの書いたものを取り上げてプリントにして次週に学生に配布した。それを参照することで、最初のうちは書き方がおぼつかなかった学生にも少しずつ内容の向上が見られた。

年度目標②について
後期に取り上げた『枕草子』は中・高校では類聚章段がほとんどであり、筆者清少納言の感性の鋭さを感じ取ることが主である。これに対して「初等中等教科教育実践」では日記・回想章段を年代順に取り上げ、清少納言とその主家・中関白家の歴史的状況を参照しつつ読解にあたらせた。このため作者とそれを取り巻く人間についての理解が深まり、その結果、今まで何気なく読み過ごしがちであった表現の裏にこめられた心情を深く読み取ることができる力がついてきた学生が多数となったと思われる。

年度目標③について
後期は演習・模擬授業の事前指導を重点的に行ったため、国文学（古典）の得意な学生については、よりレベルの高い読解に導くことができた。一方、苦手意識の強い学生に対しては、基礎的な部分を確認させることで達成感をつけさせて底上げを図るように指導を行った。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

①従来の自身の研究を踏まえた上で、今年度よりは新たなテーマである「女院文化圏の文学の研究」に取り組む。
②単著学術論文を執筆する。

２．点検・評価

年度目標①について
○注釈書がいまだ完備されていない『延慶本平家物語』を読み進め、女院文化に関する研究の基礎固めを行った。
○上記の研究を通じて、後白河院后である建春門院の記事について問題点を発見し、先行論文を調査した上で、同時代資料を検索し、新たな読みを考察した。

年度目標②について
○年度目標①に示したテーマについて単著学術論文を執筆した。ただし、完成が遅れ2011年度末まで雑誌に掲載することができず、翌年度に回す結果になってしまった。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

委ねられた任務について誠実に遂行する。本年度は、大学院学校教育研究科入学試験委員として、大学院の定員充足のための活動に努め、さらに大学院入試の適正な実施に尽力する。

２．点検・評価

○赴任一年目であるため、所属コースの先生方の教えを頂戴しつつ、コース業務の円滑な実施のため努力したと考える。
○大学院入試委員の試験班の一員として、大学院入試の適正な実施のため問題チェック・問題印刷・集計などの業務に積極的に参加した。
○大学院入学定員充足のための活動として、11月に高知大学人文学部の教員を訪問して本学の状況の説明を行った。さらに今後、専修免許取得希望者、あるいは長期履修制度を利用した教職免許取得希望者が出てきた場合には資料を渡していただくよう依頼した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

①国語コース学部2年生に対して開講される「初等中等教科教育実践Ⅱ（国語）」の科目において、担当教員として附属中学校の教員と連携し学生の指導にあたる。
②依頼があった場合は、公開講座などの講師として積極的に社会貢献に努める。

2．点検・評価

年度目標①について
「初等中等教科教育実践」の授業では、受講学生（主として学部2年生）に附属中学校で古典パフォーマンスを実施させるべく準備をさせ、学生6班が2日に分かれて実施した。その際には、あらかじめ附属中学校の先生と連絡を取り合い、また当日もコメントをいただき、連携して学生の指導にあたることができた。また9月の主免教育実習では、たびたび参観することで、実習学生の良い面、改善点について附属校の先生方からの率直なご意見を伺うことができ、教育実習後の大学の授業での指導に示唆を得ることが多かった。

年度目標②について
これは今年度はまったく実施できずに終わってしまった。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）